大分県文化財調査報告書第142輯

蕗川火山砂防護岸工工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

山ノ下遺跡

2002

大分県教育委員会

蕗川火山砂防護岸工工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

山　ノ　下　遺　跡

2002

大分県教育委員会

藤谷を臨む（西から）

序　　文

山ノ下遺跡のある豊後高田市蕗地区は国東半島のほぼ中心部にあって、美しい山々と田畑に囲まれた地域です。この谷筋には国宝富貴寺大堂をはじめ古代から中世にかけての石造物や遺跡など文化財が数多く点在しています。平成１２年、この地に蕗川火山砂防事業が実施され、それに伴い発掘調査が行われました。

遺跡からは、弥生時代～平安時代の溝から多くの土器が出土しました。これらは蕗地区における水田開発史を考える上で重要な資料となるものです。

本報告書が地域の歴史を記録した一資料として、埋蔵文化財に対する保護・保存ならびに地域文化の向上のために活用されることを期待いたします。

最後に、この調査に御協力いただきました関係各位に対して心より感謝申し上げます。

平成１４年３月２９日

大分県教育委員会教育長

石　川　公　一

例　言

1．本書は、平成１２年度に実施された豊後高田市大字蕗字山ノ下所在の山ノ下遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、蕗川火山砂防護岸工工事に伴い、高田土木事務所の依頼により大分県教育委員会が実施したものである。

3．遺構の実測及び写真は大分県教育委員会文化課職員が行った。

4．遺物実測は文化課文化財資料室整理補佐員及び井川泰成が行った。

5．遺跡出土遺物並びに遺構・遺物の実測図は大分県教育委員会文化課文化財資料室に保管している。

6．本書の執筆、編集は井川泰成が行った。

目　次

序文
例言
第１章　はじめに ---------- 1

1　調査に至る経過 ---------- 1
2　調査団の構成 ---------- 1

第２章　地理的・歴史的環境 ---------- 1～2

第３章　調査の成果 ---------- 4
1　調査の概要 ---------- 4
2　遺構と遺物 ---------- 4
(1)　1号溝 ---------- 4～16
(2)　2号溝 ---------- 17～18
(3)　3号溝 ---------- 19～22
(4)　4号溝 ---------- 22～30

第４章　まとめ ---------- 30～31

図版目次

第１図　山ノ下遺跡及び周辺遺跡分布図
第２図　山ノ下遺跡調査区位置図
第３図　山ノ下遺跡１号溝土層実測図（１/40）
第４図　山ノ下遺跡遺構配置図
第５図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図１（１/３）
第６図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図２（１/３）
第７図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図３（１/３）
第８図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図４（１/３）
第９図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図５（１/３）
第10図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図６（１/３）
第11図　山ノ下遺跡２号溝実測図（１/80）
第12図　山ノ下遺跡２号溝出土遺物実測図（１/３）
第13図　山ノ下遺跡３号溝実測図（１/80）
第14図　山ノ下遺跡３号溝出土遺物実測図１（１/３）
第15図　山ノ下遺跡３号溝出土遺物実測図２（１/３）
第16図　山ノ下遺跡４号溝土層実測図（１/40）
第17図　山ノ下遺跡４号溝出土遺物実測図１（１/３）
第18図　山ノ下遺跡４号溝出土遺物実測図２（１/３）
第19図　山ノ下遺跡４号溝出土遺物実測図３（１/３）
第20図　山ノ下遺跡４号溝出土遺物実測図４（１/３）

観察表目次

表1　1号溝出土遺物観察表(1)----14
表2　1号溝出土遺物観察表(2)----15
表3　1号溝出土遺物観察表(3)----16
表4　1号溝出土石包丁計測表----16
表5　2号溝出土遺物観察表----18
表6　3号溝出土遺物観察表(1)----21
表7　3号溝出土遺物観察表(2)----22
表8　4号溝出土遺物観察表(1)----28
表9　4号溝出土遺物観察表(2)----29
表10　4号溝出土遺物（須恵器）観察表(1)----29
表11　4号溝出土遺物（須恵器）観察表(2)----30
表12　4号溝出土石製品観察表----30

写真図版目次

図版1　調査区全景　2号溝　3号溝----33
図版2　1号溝出土遺物----34
図版3　1号溝出土遺物----35
図版4　2号・3号溝出土遺物----36
図版5　4号溝出土遺物----37
図版6　4号溝出土遺物----38

1章　はじめに

1．調査に至る経過

豊後高田市大字蕗に所在する山ノ下遺跡の発掘調査は、平成８年度より実施している蕗川火山砂防事業護岸工工事に伴う、事前の緊急発掘調査として実施された。この事業は、蕗地区の県営圃場整備と併行して圃場整備事業地の中央を蛇行して走る蕗川を直線化し、河川の氾濫を防ぐ目的で河川改修を高田土木事務所が計画した。蕗工区については、平成12年度初めに県土木建築部から分布調査依頼が県教育委員会文化課にあった。県文化課は分布調査を行い、本工区は遺跡存在の可能性が非常に高いため、事前の試掘調査が必要な地区と回答した。これをうけて県事業担当部局の高田土木事務所は、用地買収などの条件整備の整った平成12年５月に試掘調査の依頼を県文化課に行い、県文化課が試掘調査を実施した。調査は対象地区の水田、畑地に対し重機で一枚ずつトレンチを入れるかたちで平成12年７月１７日～１８日の２日間行った。その結果、溝状の遺構や土師質土器などを確認したため、本調査の協議を行った。

本調査は、平成12年９月11日～平成12年11月13日まで約２ヶ月間実施した。

2．調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県教育委員会教育長		田中恒治
	大分県教育庁文化課課長		山本芳直
	同	参事兼課長補佐	清水宗昭
調 査 員	同	副主幹	栗原　眞
	同	主任	井川泰成

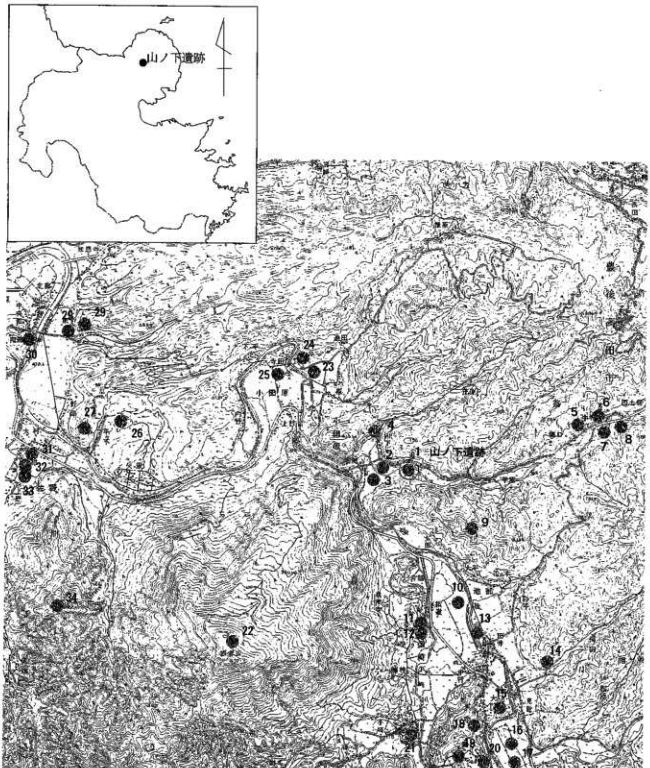
第２章　遺跡の立地と環境

大分県の国東半島は、九州の北東部、瀬戸内海に突き出たほぼ円形をした半島である。その中心に位置する両子山のかつての火山地形は開析されて放射状にのびる谷をいくつも形成した。その背陵となる尾根は粗険な岩場となり、古代・中世の山岳仏教の展開する舞台となった。さらに末端の緩やかな台地や丘陵は、集落はもとより弥生、古墳時代の墳墓の格好の築造地として利用されてきた。

蕗川が流れる豊後高田市は桂川流域に発展した地域で、歴史的、経済的にも西国東地方の中心をなしてきた。この地域の遺跡として、縄文時代の森貝塚や来縄貝塚が有名である。また、弥生時代の遺跡には田染地区の上野遺跡があり、複合遺跡であるが、弥生時代終末～古墳時代初期の遺物が出土した集落遺跡の一面をもつ。古墳時代では隣接する真玉町にかけての沿岸部台地上に入津原丸山古墳、猫石丸山、真玉大塚古墳などの全長60～100ｍ級の大型古墳が並び、この地域が宇佐地方に劣らぬ勢力の本拠地であったことを示している。また、桂川流域の古墳については、佐野古墳、光門古墳等の横穴石室墳が知られている。古代については、カワラガマ遺跡で平安時代の瓦を焼成した平窯跡が確認されており、平窯の約１km北西側には古代寺院の薬王寺（薬恩寺）跡の存在が推定されている。また、上屋敷遺跡では集落跡が確認されている。

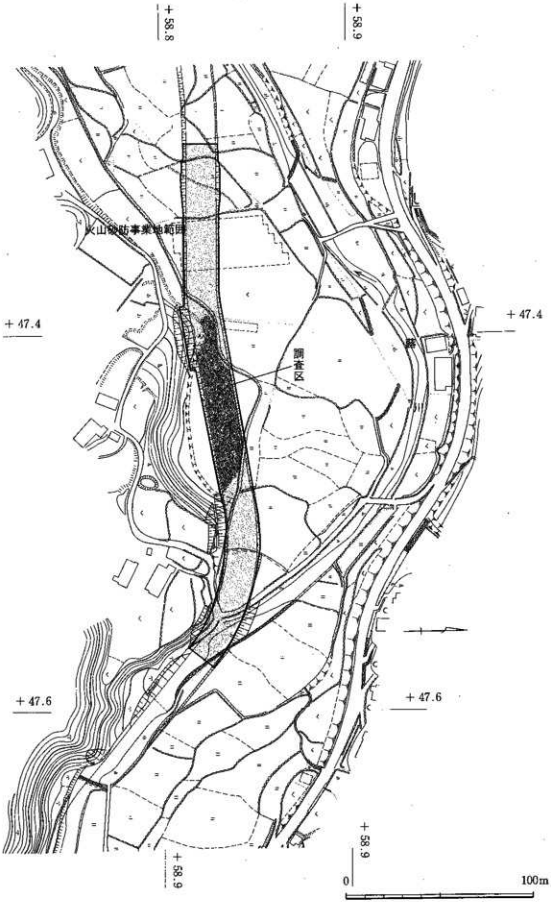
山ノ下遺跡のある蕗地区は蕗川が流れるおよそ４kmの谷が中心で国宝の富貴寺大堂をはじめ其ノ田板碑等の多くの石造物遺跡が点在する。また富貴寺の東には坊跡の比定地とされる富貴寺遺跡（東地区）や蕗政所遺跡などが知られている。蕗地区は田染盆地の北側に位置し、田染池部地区とあわ

せて宇佐八幡宮の根本荘園である「本御荘十八カ所箇所」の一つ田染荘を形成する糸永名とされている。山ノ下遺跡では田染条里以前のこの地の水田形成の過程をうかがう上で、重要な手がかりを得ることができた。



第1図　山ノ下遺跡及び周辺遺跡分布図

1 山ノ下遺跡
2 道ノ下遺跡
3 糸永遺跡
4 清流寺
5 藤政所跡
6 富貴寺
7 仏正田遺跡
8 富貴寺遺跡裏地区
9 中林横穴墓群
10 池部横穴墓群
11 上屋敷古墳
12 上屋敷遺跡
13 トシノ神遺跡
14 岡田横穴墓群
15 戸原台遺跡
16 上野条理
17 上野遺跡
18 大平第1遺跡
19 旭遺跡
20 上荒場遺跡
21 小崎城跡
22 西叡山高山寺
23 鍋手派遺跡
24 迫田遺跡
25 寺田遺跡
26 カワラガマ遺跡
27 鞍懸城跡
28 薬恩寺跡
29 辻遺跡
30 森貝塚
31 佐野古墳
32 光門1号墳
33 光門2号墳
34 鞍懸城跡



第２図　山ノ下遺跡調査区位置図

第３章　調査の成果

１　調査の概要

山ノ下遺跡は蕨川が桂川と合流する手前 200 mの左岸にあり、川が蛇行し浸食された標高 77 m余りの段丘上に位置する。調査区の現況は水田で、調査範囲は東西約 95 m、南北最長約 16 mを測る。調査区はほぼ平坦で、現水田の基盤土層を取り除くと、もう１面水田層が現れ、さらに除去すると古代の遺物包含層を確認した。調査ではこの包含層までを重機で除去した後、作業員による遺構検出作業を行った。その結果、現水田面よりおよそ 60 cm下で暗黄褐色の地山（礫を含む）面が現れ、これを掘り込むかたちで遺構が検出された。遺構検出作業は、この面を広げて行った。

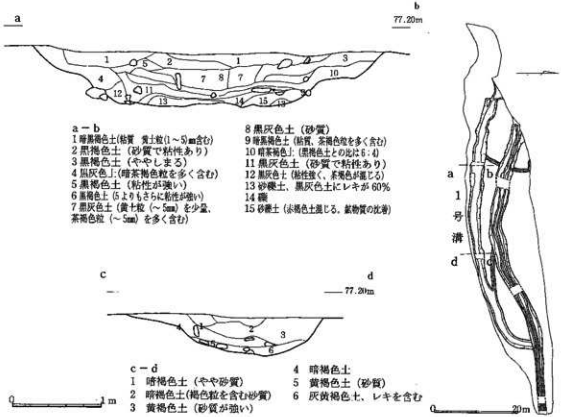
本遺跡では、溝状遺構四条（大溝二条・大溝から枝分かれした小溝二条）、ピット、土坑などの遺構が検出され、これらにともなう出土遺物として、弥生土器、土師器、須恵器のほか石包丁などが出土した。

２　遺構と遺物

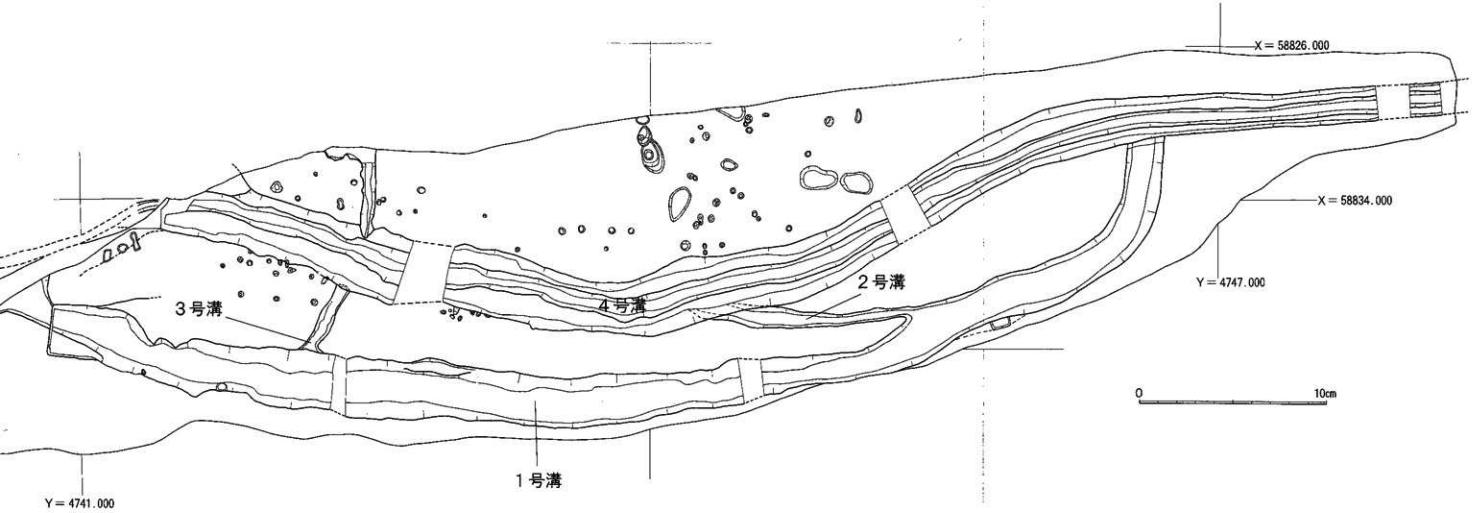
溝状遺構（以下溝と記す）は調査区内において四条確認された。出土検出した遺物から、弥生時代中期～古墳時代初頭と奈良時代末～平安時代初めの大きく２時期に分けられる。四条のうち１・４号溝は山裾に沿うように調査区を東西にほぼ平行してはしり、２・３号溝は１号溝より分岐した小規模なものである。

（１）１号溝（第４図）

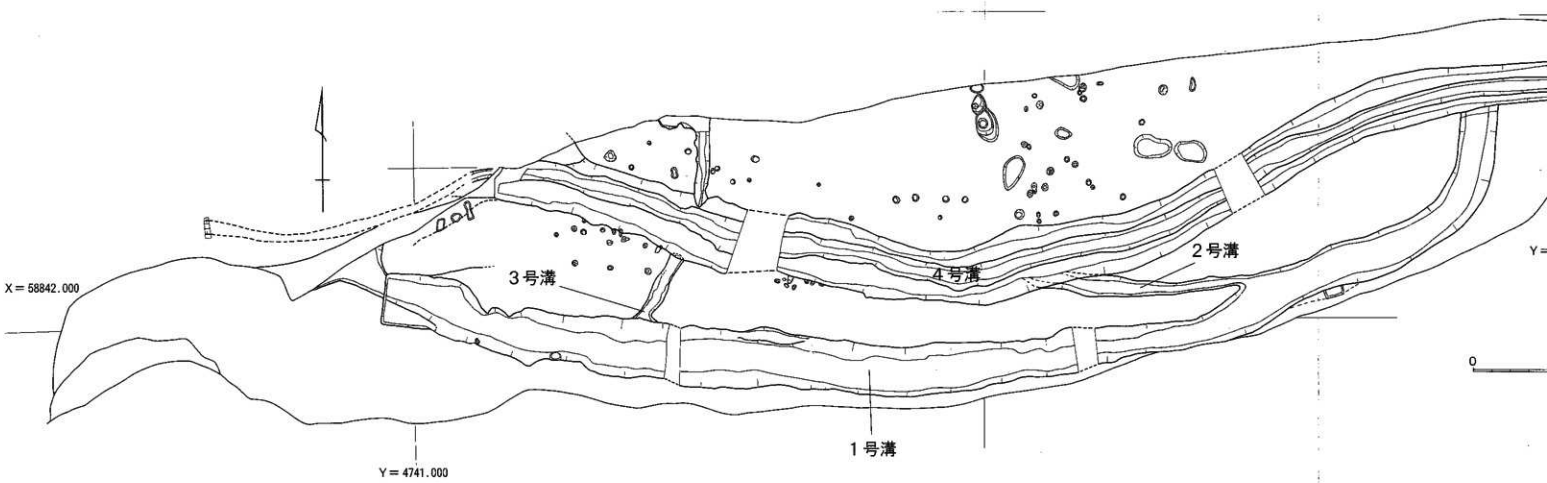
溝は東側上流部に４号溝に切られる形であらわれ、下流へおよそ 60 m以上山裾に沿うように右カーブを描きながら走る。溝断面はU字形を呈し、検出面での幅２～３m、深さ 0.4 m～0.7 mを測る。埋土は砂質が強く、礫も多く混じる。遺物は上層で完形に近い土器が検出され、上下層とも一定量の遺物が出土した。また、溝底部には赤褐色の鉱物質の析出が認められたことから、水路としての役割を果たしていた溝であるとみられる。



第３図　山ノ下遺跡１号溝土層実測図（1／40）



第4図　山ノ下遺跡遺構配置図（1／200）



第４図　山ノ下遺跡遺構配置図（１／200）

出土遺物（第５～第10図）

1～6は甕の口縁部で、1～4はいずれも頸部に稜を生じ逆Ｌ字に屈曲し口縁部がはね上がっている。中でも1は屈曲部外面の下位に三角突帯がめぐる。7～12は甕または壺の底部である。11については胴部も一部残る。これらは平底を呈している。13は壺の胴部で、二条の貼り付け突帯を有する。1～13は各々の特徴から弥生時代中期前半から後半にかけての時期と判断する。

14～16・18は甕の口縁部で17は壺で口縁端部をやや内側に立ち上げ、端部に三条の凹線文を施す。19～21は甕または壺の底部である。これらは明確な平底をなし、いずれも弥生時代後期前半に属するものと思われる。20、21は上げ底の形態を呈する。

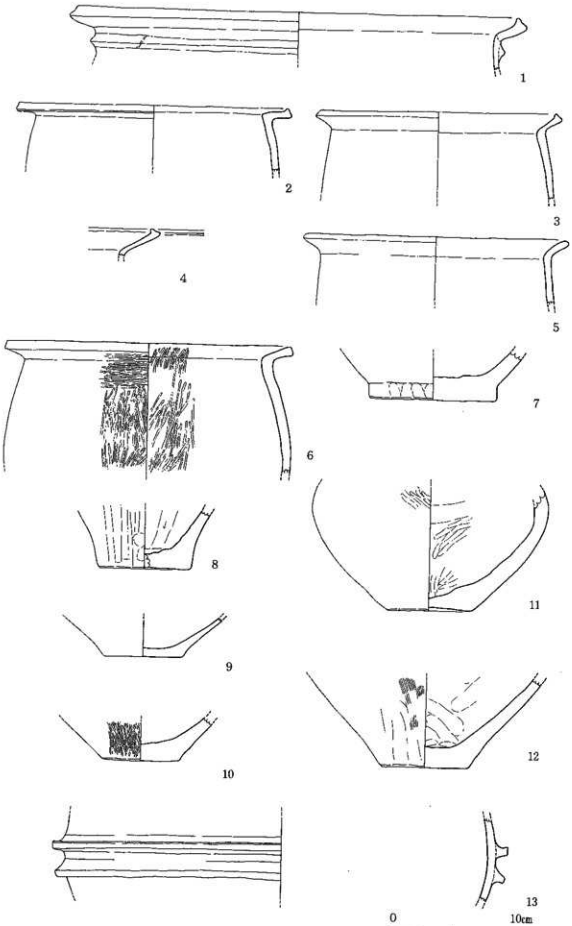
22,23は複合口縁壺である。両者とも口縁部に櫛描波状文を有するものである。頸部に比べ口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。22は口縁立ち上がり部下部の屈曲部に刻み目をもち、23は口縁部外面に丹塗りをほどこす。24、25は壺の口縁部、26は高坏の頸部、27は高坏の坏部である。内湾しながら開き、口縁部近くで一度屈曲し外反する。22～27は弥生後期中葉と考えられる。

28、29は甕で、28は頸部に貼り付け突帯を一条有する。29はやや長胴気味の体部から口縁がくの字状に折れる。30、31、33は甕、32は壺の底部である。いずれも平底の性格がはっきり残る。28～31は内外面ともハケメ調整である。34は台付き鉢、35は器台で絞り痕が内面に残る。36は甑である。孔の径は1.2cmを測る。時期は弥生後期後葉から終末に比定される。

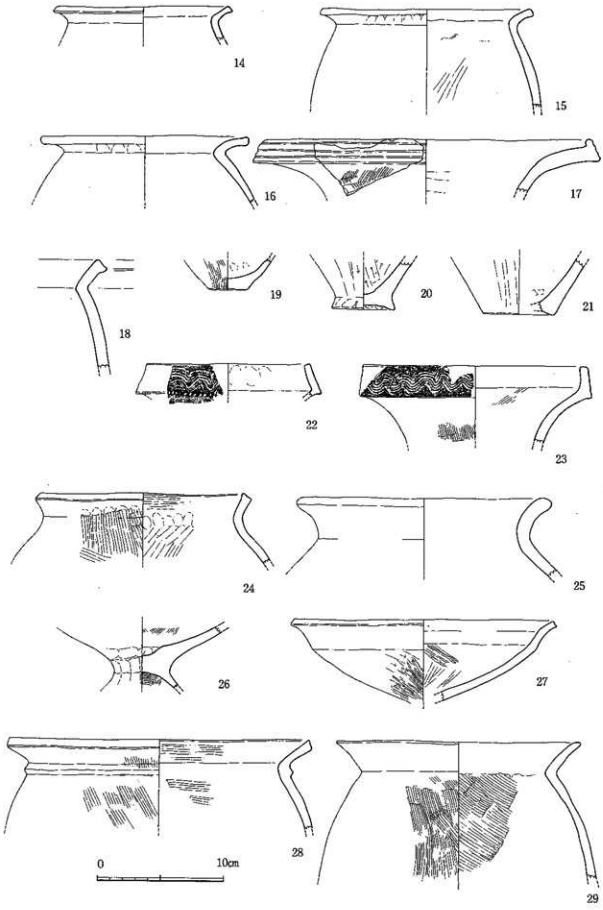
37～41・43は甕で38～40は口縁部、41、43は底部である。この一群以降の甕、壺の底部は丸底、または尖り気味の底を呈する。37は胴部が一部欠損しているもののほぼ完形である。胴部に平行タタキ痕が認められる。42は試掘時に下流部で検出した壺で、外面には粗いハケメを施す。44～47は高坏である。44は溝の上層から出土した。坏部は体部から屈曲して立ち上がり、口縁部で再び逆　L字条に屈曲し外反する。口縁端部は開き気味にわずかに立ち上がる。脚部は上方まで中空で、調整は内外面ともナデである。45は面に口縁端面竹管状の工具による刺突文を施す。46、47は脚部で、ハの字に裾が開く。48～52は甕である。48は小甕で口縁がくの字に折れ、体部は球形を呈す。外面ハケ調整であるがかなり目が粗い。51、52は瀬戸内系の土器である。51は口縁部に二条の凹線文をもつ。内外全面が鮮やかな赤橙色を呈する。49～52の内面にはケズリがみられる。53は下流部上層から出土したほぼ完形の壺で、口縁が頸部からくの字に折れやや外反気味に長く立ち上がる。外面はナナメ方向のハケメと胴部下半にヘラケズリが認められ、内面はハケメが密に施されている。54の口縁部はくの字に屈曲し外反気味にのびる。55は筒状の頸部を呈する。61は壺の頸部である。長くのびた頸部の下位半分に五条の沈線とその下に貼り付け突帯が認められ、さらに赤色顔料が外面に残る。

62は緑泥変岩製の石包丁である。

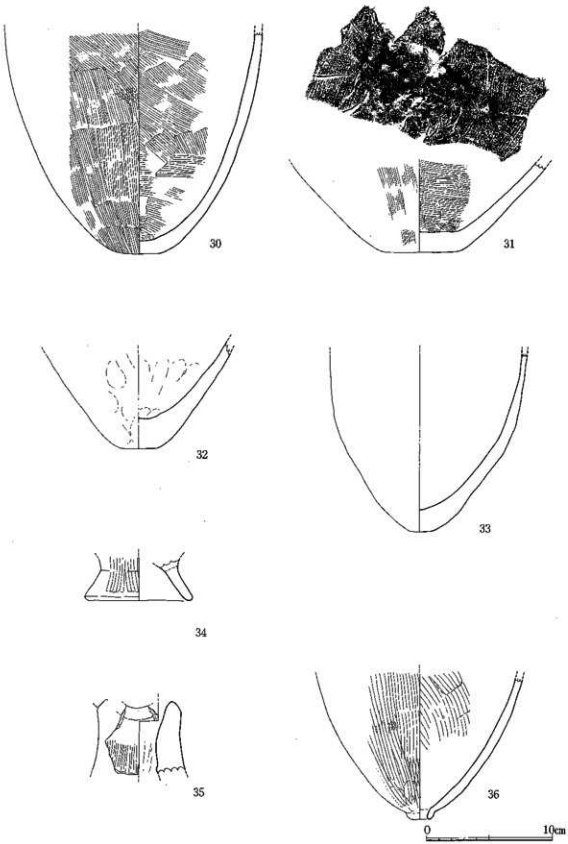
以上の土器は一部古層のものを含むが埋没時期は弥生時代中期～終末にかけてと思われれ、最終的には古墳時代初頭まで入ると考えられる。



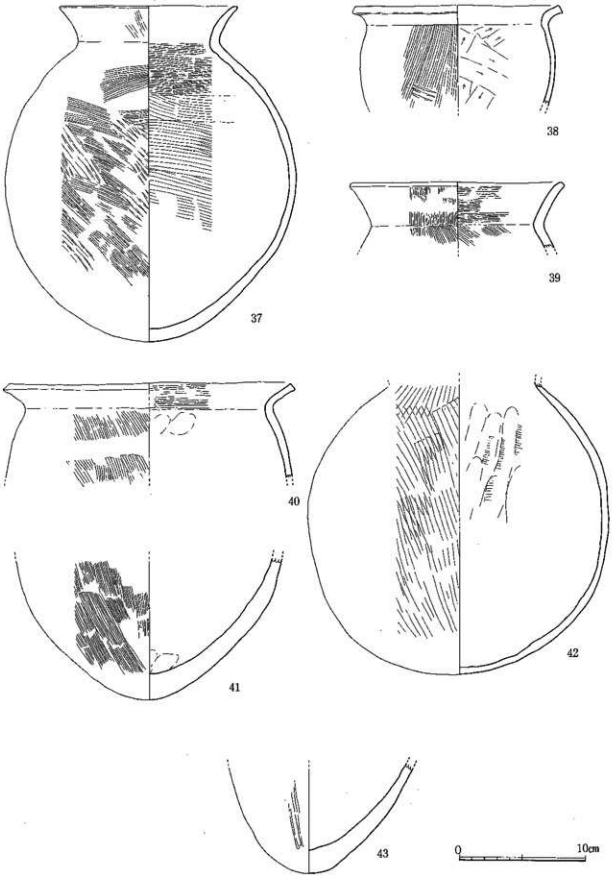
第５図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図１（１/３）



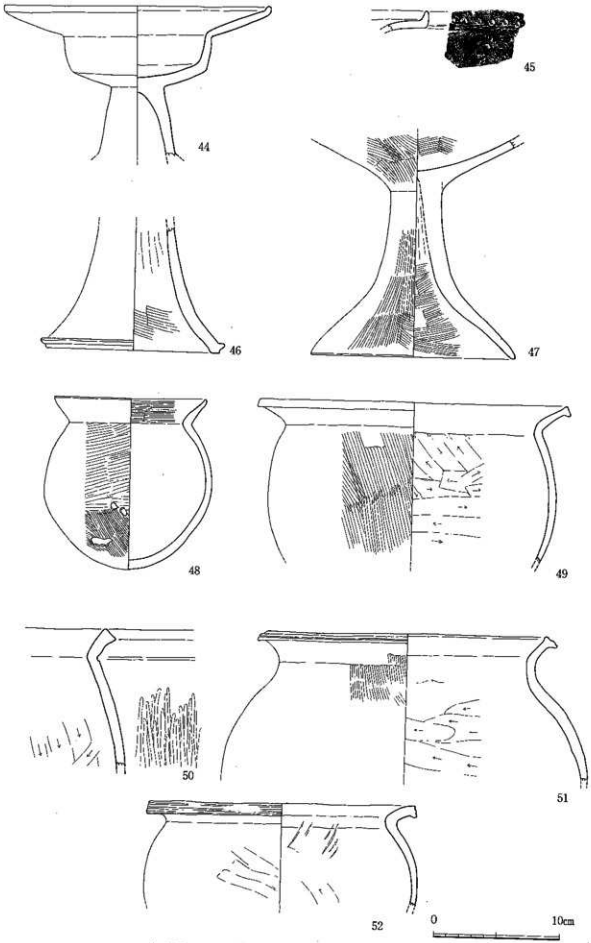
第６図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図２（１/３）



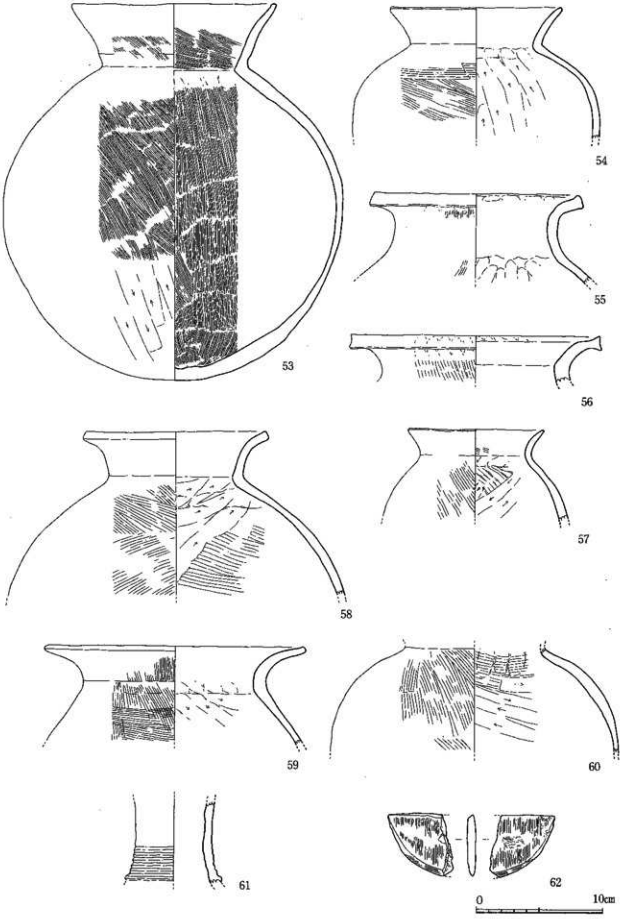
第７図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図３（１/３）



第８図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図４（１/３）



第９図　山ノ下遺跡１号溝出土遺物実測図５（１/３）



第10図　山ノ下遺跡1号溝出土遺物実測図6（1/3）

表１　１号溝出土遺物観察表(1)

単位：cm

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		使用痕	備考
					外面	内面		
1	甕	(34.8) － －	砂粒　少、角閃石　微量 長石　微量、茶色粒　少、 石英　微量	明黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ		跳ね上がり 口縁
2	甕	(18) － －	砂粒　少、角閃石　少 長石少、茶色粒　多	明淡褐色	ナデ	ナデ		跳ね上がり 口縁
3	甕	(18.4 － －	砂粒　少、角閃石　白色粒	淡灰褐色	ヨコナデ タテナデ	ヨコナデ ナデ		跳ね上がり 口縁
4	甕	－ － －	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　少、 石英　少	明淡褐色 明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ		内面赤変
5	甕	(20.2) － －	砂粒　少、角閃石　少、 茶色粒　少、石英　微量	淡黄褐色	ヨコナデ 粗いナデ	ヨコナデ　粗い ナデ		
6	甕	(22) － －	砂粒　少、角閃石　多、 白色粒　少、茶色粒　少	明淡黄褐色	ヨコナデ　ヘラ ミガキ（タテ、 ヨコ、ナナメ）	ヨコナデ タテヘラミガキ		
7	甕	－ － (6.4)	砂粒　少、角閃石　多 茶色粒　少、石英多	淡黄褐色	ナデ 指押さえ	指圧痕 不定方向ハケメ	スス付着 （外面、外 底部）	
8	甕	－ － 7.0	砂粒　多、角閃石　少 茶色粒　少、石英　少	橙褐色	板状工具による タテナデ 指圧痕	ヘラケズリ		赤変あり
9	甕	－ － 6.2	砂粒　少、角閃石　少、 長石　微量、白色粒　微量	明淡黄褐色 赤橙褐色	ナデ	ナデ		
10	甕	－ － 6.0	砂粒　少、角閃石　少、 白色粒　多	淡黄褐色・ 黒色	ヘラミガキ(タテ・ ナナメ) 底部不定 方向ヘラミガキ	内底部指圧痕・ 指ナデ		
11	甕	－	砂粒　少、長石　少、角 閃石　微量、茶色粒　少	明淡黄白色	ナデ? ナナメヘラミガキ	ナナメヘラケズ リ　ナナメ ヘラミガキ		底部に赤変 あり
12	壺	－ － 6.4	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少	淡褐色	タテハケメ 指ナデ	ナナメ指ナデ 内底部指圧痕		
13	壺	(35.8) － －	砂粒　少、角閃石　多、 茶色粒　微量	明淡褐色	ナデ　指ナデ ヨコナデ	ナデ		
14	甕	(13.6) － －	砂粒　少、角閃石　少、 白色粒　微量	黒灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 板状工具による ヨコナデ		
15	甕	(16.6) － －	砂粒　少、角閃石　少、 白色粒　少、茶色粒　少	明淡褐色	ナデ 指押さえ			接合痕あり
16	甕	(16.2) － －	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少	明淡褐色 黒灰色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	スス付着	
17	甕	(25.8) － －	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　少、 白色粒　少	淡黄褐色	ヨコナデ ナナメハケメ	ヨコナデ　ナデ ヨコヘラケズリ		
18	甕	－ － －	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　少	明淡褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ		
19	小壺	－ － 3.2	砂粒　少、角閃石　少、 茶色粒　少	黒褐色 黒灰褐色	ナデ　タテハケ メ	指押さえ　ヨコ ナデ　タテ指ナ デ		
20	甕	－ － 5.0	砂粒　少、角閃石　多、 白色粒　少	淡褐色	板状工具による タテナデ　指押 さえ	ヘラケズリ 圧痕	スス付着	
21	甕	－ － 5.6	砂粒　多、角閃石　多、 白色粒　多、茶色粒　少、 石英　少	赤褐色 酸橙褐色	タテナデ	ナデ		
22	壺	(13 － －	砂粒　多、角閃石　少、 白色粒　少、茶色粒　多	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 指押さえ後ナデ		複合口縁壺
23	壺	(18) － －	砂粒　少、角閃石　少、 長石　微量	明淡褐色 明橙色(口縁 外に斑布)	ヨコナデ ナナメハケメ	ヨコナデ ナナメハケメ		複合口縁壺 櫛描波状文
24	壺	16 － －	砂粒　多、角閃石　少、 長石　少、茶色粒　多、 灰色粒　多	淡褐色	ヨコナデ　指押さ え　タテハケメ ナナメハケメ	ヨコハケメ　指 押さえ　ナナメ ハケメ		

表2　1号溝出土遺物観察表(1)

単位：cm

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		使用痕	備考
					外面	内面		
25	壺	19.2 — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　多	明淡黄褐色	ナデ	ナデ		
26	高坏	4.4(復原) — —	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　少	淡褐色 明橙色	ナデ　ヨコ指ナデ 指押さえ　タテ指 ナデ　ヨコナデ	ハケメ ナデ 指圧痕	赤変あり	
27	高坏	(20.6) — —	砂粒　少、角閃石　少、 雲母　少、茶色粒　少	明淡褐色	ヨコナデ　ナナメ ヘラケズリ　ナナメヘラミガキ	ヨコナデ ナナメヘラミガキ　タテ 整工具によるハケメ?		
28	甕	23.6 — —	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少、　茶色粒　少	明淡褐色 明淡灰褐色	ヨコナデ ユビナデ ナナメハケ	ヨコナデ ヨコハケメ		貼り付け三角突帯
29	甕	19.2 — —	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少、、白色粒　少	淡明橙褐色 淡褐色	ヨコナデ タテハケメ ナナメハケメ	ヨコナデ ナナメハケメ		
30	甕	— — 3.0	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少、白色粒　多、 茶色粒　少	淡灰褐色 橙色　明灰褐色	タテハケメ ナナメハケメ	ヨコハケメ ナナメハケメ		
31	壺	— — 5.4	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少	明淡黄褐色	タテハケメ　ナデ	ヨコハケメ ナナハケメ 指頭 不定方向のハケメ		拓本内底部
32	甕	— — 2.8	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　少	淡褐色・赤褐色 灰褐色	指押さえ ナデ	指ナデ 指押さえ	赤変あり	
33	甕	— — 1.7	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、茶色粒　少	淡黄褐色 黒灰色	ナデ	ナデ	スス付着	
34	台付鉢	— — 8.2(高台部)	砂粒　多、角閃石　少、 茶色粒　少、石英　多	橙褐色 明橙色	タテハケメ	ナデ	赤変あり	
35	器台	— — 6.4	砂粒　多、角閃石　多、 白色粒　多、灰色粒　多 茶色粒　少	橙黄褐色	ナデ タテハケメ	ナデ		
36	鉢	— — 1.4	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、茶色粒　多、 白色粒　少	淡褐色 黒色	タテハケメ 指圧痕	ナナメハケメ ナデ	スス付着?	
37	壺	(14.0) 26.6 —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、白色粒　多 —	明淡橙褐色 暗灰色・淡灰褐色	ナナメハケメ 板ナデ状の粗いハケメ	ヨコハケメ ナナメ・ヨコハケメ ナデ	スス付着	胴部完形
38	甕	16 — —	砂粒　少、角閃石　少、 白色粒　少、茶色粒　少	淡褐色 黒灰色 橙赤色	ヨコナデ ナナメハケメ	ヨコナデ 不定方向ヘラケズリ	スス付着 赤変（外面）	
39	甕	16.4 — —	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少、茶色粒　少	淡褐色	タテハケメ ヨコナデ ナナメハケメ	ヨコナデ ヨコハケメ ナナメハケメ		
40	甕	11.3 — —	砂粒　少、角閃石　少、 白色粒　微量、茶色粒 多	明淡褐色	ヨコナデ ナナメハケメ	ヨコハケメ 圧痕　ナデ		
41	甕	— — —	砂粒　少、角閃石　少、 灰色粒　多、茶色粒　少、 白色粒　多	淡褐色	ナデ ナナメハケメ	不定方向のナデ 指圧痕		
42	壺	13.0 (頸部) —	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少、茶色粒　少、 白色粒　多	淡明橙褐色 暗灰色	ナデ ナナメハケメ	ナデ ヨコハケメ痕 ナナメ指ナデ	スス付着	試掘
43	甕	— — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、白色粒　多	黄褐色 灰黄褐色	ナデ 一部にヘラキズ状のタテ条痕	ナデ		
44	高坏	21.6(内面口縁) — 4.2(脚部径)	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　多	明黄褐色	ナデ	ナデ		
45	高坏	— — —	砂粒　少、角閃石　微量、 長石　微量、茶色粒　少、 白色粒　微量	淡灰褐色 明淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		拓本
46	高坏	— — (13.8)	砂粒　少、角閃石　少、 白色粒　微量、茶色粒 少	淡褐色	タテ方向ナデ	ナナメハケメ ナデ		
47	高坏	— — (15.2)	砂粒　少、角閃石　少、 茶色粒　少	明淡褐色	タテハケメ 不定方向のハケメ	ヨコ・ナナメハケメ　しぼり痕	スス付着	
48	小壺	(12) 13.5 —	砂粒　多、角閃石　多、 白色粒　多、石英　多	淡灰褐色 黒灰色 赤橙色	ナナメ粗いハケメ	口縁部のみヨコハケメ	スス付着 赤変あり	

表3　1号溝出土遺物観察表(3)

単位：cm

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		使用痕	備考
					外面	内面		
49	甕	24.2 — —	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少	明茶褐色 灰褐色 明茶黄褐色	ヨコナデ ナナメハケメ	指圧痕 ナナメヘラケズリ ヨコヘラケズリ	外胴部下方 黒斑	
50	甕	— — —	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　少	淡黄褐色 暗灰色	ヨコナデ タテヘラミガキ	ヨコナデ タテヘラミガキ	黒斑あり	
51	甕	(22.2) — —	砂粒　多、角閃石　多、 灰色粒　多、茶色粒　多	明赤褐色 淡褐色	ヨコナデ タテハケメ	ヨコナデ ヨコヘラケズリ	表面に赤い 鉄土塗布か?	凹線文
52	甕	(21) — —	砂粒　少、角閃石　少、 茶色粒　少	淡黄褐色	ヨコナデ 板状工具による ナナメナデ	ナナメヘラキズ 又はナデ ナナメヘラケズリ		
53	壺	16.2 29.9 —	砂粒　多、角閃石　多、 長石、茶色粒　多、 石英　少、白色粒　少	淡黄褐色	ヨコナデ、ナナメハケメ、上下方向のケズリ	指圧痕 タテハケメ ナナメハケメ	口縁部から底部にかけて斑点状のススが付着	完形
54	壺	(13.6) — —	砂粒　多、角閃石　多、 白色粒　多、茶色粒　多	明淡褐色 暗灰色 明橙色	ヨコナデ　ナデ ヨコハケメ ナナメハケメ	タテヘラケズリ	黒斑　赤変 あり	
55	壺	(16) — —	砂粒　少、角閃石　少、 石英　多	明橙色	ナデ タテハケメ	指押さえ ヨコナデ タテ指ナデ		
56	甕	(19.6) — —	砂粒　少、角閃石　微量 長石　微量、茶色粒　少	明淡黄白色 黒色	指圧痕＋ナデ ナナメハケメ	指圧痕 ナデ ヨコナデ	スス付着	
57	壺	10.6 — —	砂粒　少、角閃石　多、 白色粒　少、茶色粒　多	明淡褐色 黒灰色	ナナメハケメ	ヨコナデ ナナメハケメ 指おさえ　頸ハ ナナメヘラキズ	スス付着	
58	壺	14.2 — —	砂粒　少、角閃石　多、 白色粒　多、茶色粒　少	淡灰褐色 暗灰色	ナナメハケメ ヘラケズリ	ヨコナデ　ナナメ上方向のヘラケズリ ヨコナナメハケメ	スス付着	
59	甕	20.0 — —	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少、茶色粒　多 白色粒　多	淡明橙色	ヨコナデ ナナメハケメ	ヨコナデ ナナメケズリ ナデ　指おさえ		
60	壺	— — —	砂粒　少、白色粒　少 角閃石　少、茶色粒　少、	淡黄褐色 黒灰色	ナナメハケメ	ヨコメハケメ　指圧痕　ナナメヘラケズリ		
61	長頸壺	(7.0) (頸部径) —	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少	明淡褐色 暗赤色	ナデ	指ナデ	外面に赤彩を施す	5条沈線

表4　1号溝出土石包丁計測表

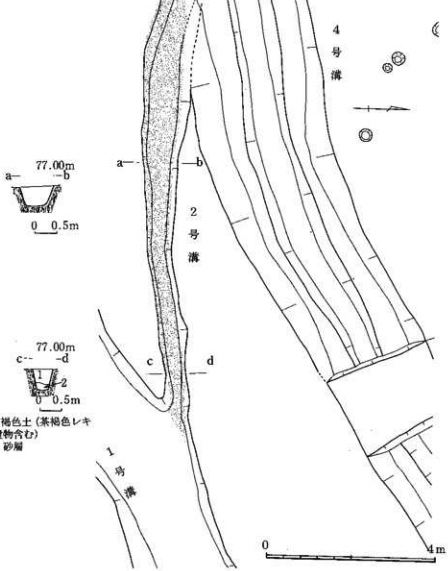
番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
62	緑泥変岩	4.2cm＋α	4.8cm	0.7cm	18.8g

（2）２号溝（第11図）

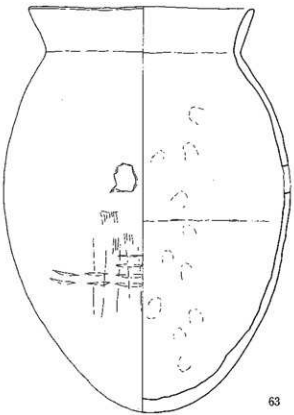
２溝は１号溝から分岐し４号溝に切られるまでおよそ10.4ｍの長さでほぼ直線的に西へ延びる状態で検出された。幅は西側下流部へ行くにつれやや広がりをみせ、0.56ｍ～1.2ｍを測り、深さは最深部で約0.5ｍ、断面Ｕ字形を呈する。埋土の状況は二層で、遺物を含む褐色土とその下の砂層からなる。４号溝に切られた先の流路は２号溝を横断した路川寄りの調査区では検出されなかった。

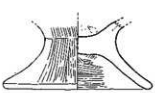
出土遺物（第12図）は甕と台付鉢の２点で、**63**の甕は口縁部が一部欠損しているもののほぼ完形で口を下流部に向ける状態で出土した。丸底を呈しやや長胴気味の体部から口縁がくの字に折れる。胴部中央に穿孔がある。調整は内外面ともナデを基本にしているが外面には平行タタキ痕が認められる。**64**は台付鉢の脚部である。外面はタテ方向、内面はヨコ方向のハケメ調整である。１号溝との分岐点近くの上層で出土している。

以上２号溝は出土土器の特徴などから弥生後期終末の頃と考えられる。



第11図　山ノ下遺跡２号溝実測図（1/80）





第12図　山ノ下遺跡２号溝出土遺物実測図(1/3)

表5　２号溝出土遺物観察表

単位：cm

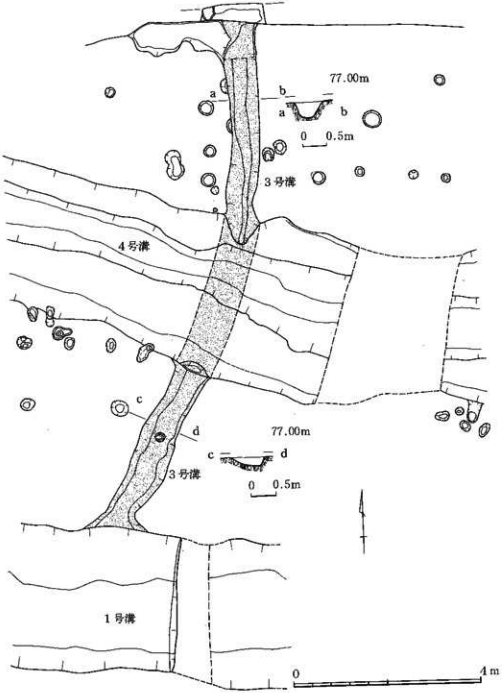
番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		使用痕	備考
					外面	内面		
63	甕	17.6 32.1 ―	砂粒　多、角閃石　多、長石　少、茶色粒　少、白色粒　多	淡黄褐色	ヨコナデ　ナデ タテハケメ 一部平行タタキ痕	指おさえ		ほぼ完形 丸底
64	台付鉢	― ― 11.4	砂粒　多、角閃石　多、長石　少、茶色粒　多	明淡褐色	ナナハケメ タテハケメ ナデ	指ナデ　指圧痕(脚部内底)　脚部内底(ほんち状ハケメ　ヨコハケメ		

（3） 3号溝（第13図）

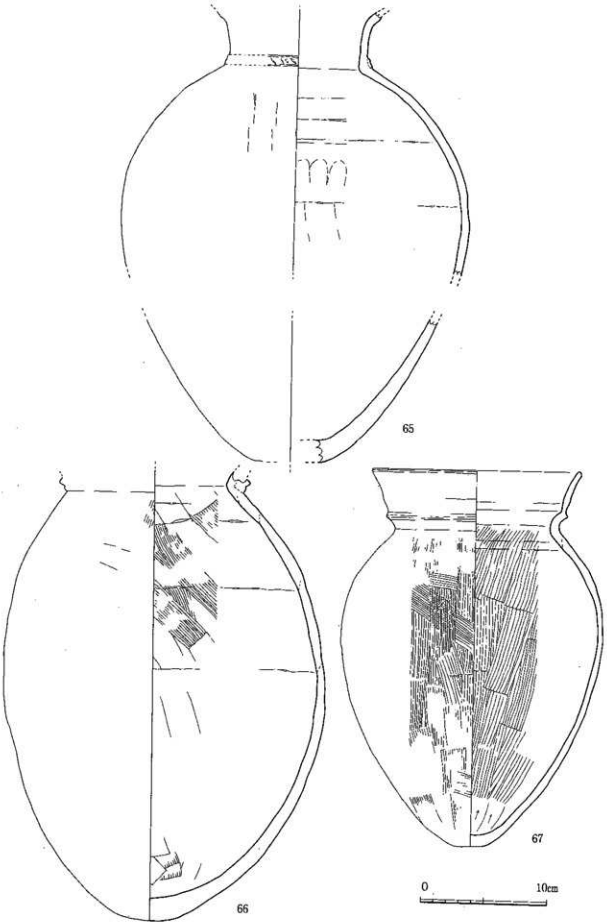
3号溝は1号溝から流れ出るかたちで蕗川に向かい北へ延びている。2号溝と同様に途中4号溝に切られる。検出された長さは11.2m、幅0.6m～0.8mで断面U字形を呈する。埋土は1号溝の上層の埋土と一致し、切り合いがはっきりしないことから同一時期のものと思われる。しかし2号溝と異なり水が常時流れた痕跡は埋土からはうかがえない。

出土遺物（第14・15図）は図化可能なものは8点で甕・壺・鉢である。**65**、**66**は頸部に刻み目のあるベルト状突帯を有する壺で、**65**の胴部は卵形を呈する。**67**は二重口縁壺で、内面にはヘラケズリ痕がみられる。**68**～**71**は甕である。**68**、**71**の底部は平底の名残がみられる。**70**は口縁部のみの完形で逆さになった状態で出土している。また**65**～**68**、**72**は調査区北壁付近でかたまって出土している。

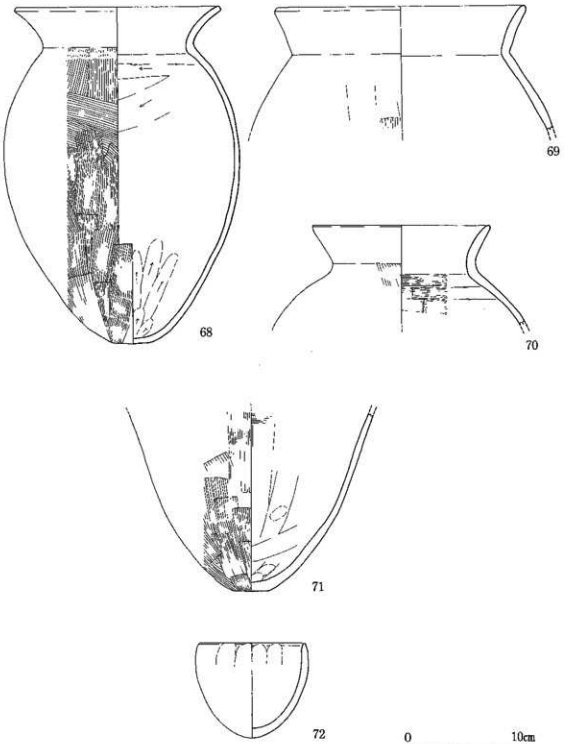
以上のことから3号溝は弥生後期終末の時期の溝と考えられる。



第13図　山ノ下遺跡3号溝実測図（1/80）



第14図　山ノ下遺跡3号出土遺物実測図1（1/3）



第15図　山ノ下遺跡3号出土遺物実測図2（1/3）

表6　3号溝出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		装用痕	備考
					外面	内面		
65	壺	— — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、石英　微	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ　指圧痕　タテナデ	外面底部にスス付着	頸部付け根に突帯
66	壺	— — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、石英　少、 白色粒　多	黄褐色	ナデ	ナナメハケ ヘラナデ		突帯あり 肩形頸部

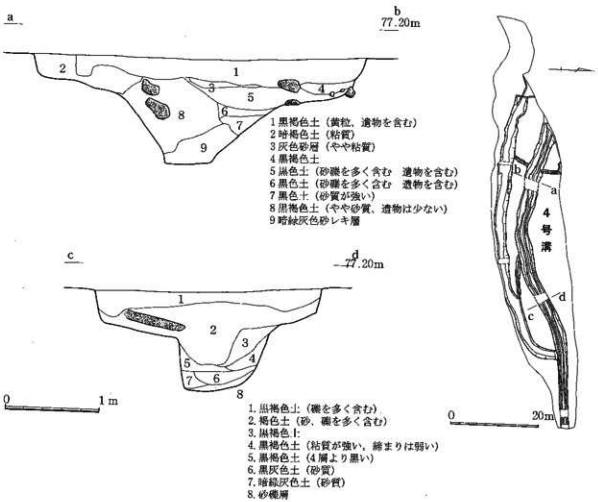
表7　3号溝観察表(2)

単位：cm

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		使用痕	備考
					外面	内面		
67	壺	16.4 30.0 2.8	砂粒　多、角閃石　多、長石　多、石英　少	黄褐色	ヨコナデ　タテ・ヨコ・ナナメハケ	ヨコナデ　タテハケ　ナデ		
68	甕	17 28.4 —	砂粒　多、角閃石　多、長石　多	黄褐色	ヨコナデ　ハケメ（タテ、ヨコ、ナナメ）	ヨコナデ　ヘラナデ　指ナデ　指圧痕	スス付着	
69	甕	20.6 — —	砂粒　多、角閃石、長石　石英	黄褐色	ヨコナデ　ヘラナデ　タテハケ	ナデ　ヨコナデ		
70	甕	14.8 — —	砂粒　多、角閃石　多、長石　多、石英　多	黄褐色	ヨコナデ　ナナメハケメ　ナデ	ナデ　ヨコハケメ		
71	甕	— — —	砂粒　多、角閃石　多、長石　多、石英　多	黄褐色	タテハケメ　ナナメハケメ	指ナデ　指圧痕		
72	小鉢	(8.8) 8.0 —	砂粒　少、角閃石　少、白色粒　多	淡橙褐色	指ナデ後指おさえ	指ナデ後指おさえ		

（4）4号溝

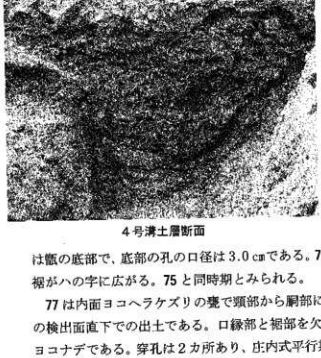
調査区の中央東西方向に4号溝がみられる。この溝は1～3号溝を切る形で掘られており山裾の地形に沿って緩やかに蛇行している。溝は西側調査区外では隣接する水田の造成時に削平を受けたと考えられ、わずかに底部を15cm程残して約13m程度下流へ延びていることが確認できた。調査区



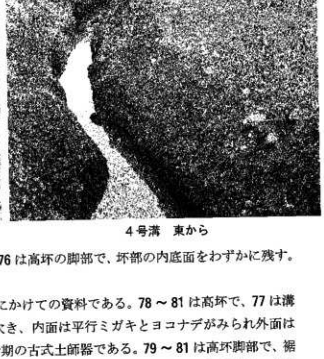
第16図　山ノ下遺跡4号溝土層実測図（1／40）

内での検出幅は東側上流部へいくにしたがい狭くなるかたちで、1.8m～3.4mを測る。最も深い部分で1.2mを測りY字形を呈する。土層（第１６図）は上層に粘質土、中下層には砂質層の堆積がみられ掘り直しなどは認められない。出土遺物の大部分は土器で、完形品はなかった。遺物は上層～下層いずれも平均して出土しているが、８層（黒褐色土砂質傾向ややあり）だけは遺物の出土が少なかった。

４号溝の出土遺物は、**73・74** は甕で、**73** は下城式土器の口縁部と思われる。口縁部下に刻み目のない突帯を一条めぐらす。**74** は凹線文を有し端部がわずかに肥厚する。瀬戸内系の土器である。**75**



４号溝土層断面



４号溝　東から

は甑の底部で、底部の孔の口径は3.0㎝である。**76** は高坏の脚部で、坏部の内底面をわずかに残す。裾がハの字に広がる。**75** と同時期とみられる。

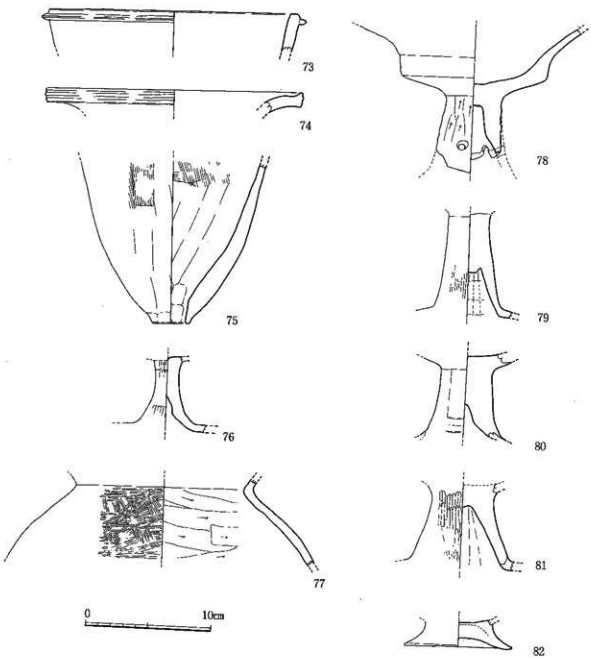
77 は内面ヨコヘラケズリの甕で頸部から胴部にかけての資料である。**78～81** は高坏で、**77** は溝の検出面直下での出土である。口縁部と裾部を欠き、内面は平行ミガキとヨコナデがみられ外面はヨコナデである。穿孔は２カ所あり、庄内式平行期の古式土師器である。**79～81** は高坏脚部で、裾が稜線をもって屈曲しハの字に開く形である。**82** は脚付鉢の脚部である。これらは弥生終末～古墳初頭資料として位置づけられる。

83・84 は甕の口縁部で内外ともにナデが施される。**85～93** は坏である。**85・86** は内外面とも丹塗りが施されている。器形は体部は緩やかに丸みを帯び、口縁部は丸くおさめ、内面に沈線状の凹みがめぐる。**87～92** はいずれも外底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。**91** は体部が内湾しながら斜め上方に立ちあがり口縁部に至る。**92** は体部が斜め上方に直線的に立ち上がり口縁部端部は反り気味に尖る。**93** は淡橙褐色の坏で、精緻なつくりである。**94～102** は埦である。**94** の底部はヘラ切り離し後、高台を付け指でナデつけている。高台の高さは1.1㎝である。**96～101** は黒色土器埦である。いずれも内面を丁寧にヘラミガキしている他、外面をヨコナデ調整している。体部は内湾しながら斜め上方にのびる。**102** は内外面ともナデ仕上げか、高台は貼り付け高台で大きく内傾する。粗野なつくりである。**103・104** はともに甑で口縁部と把手の部分である。**105** は何かの蓋であろうか、不明である。

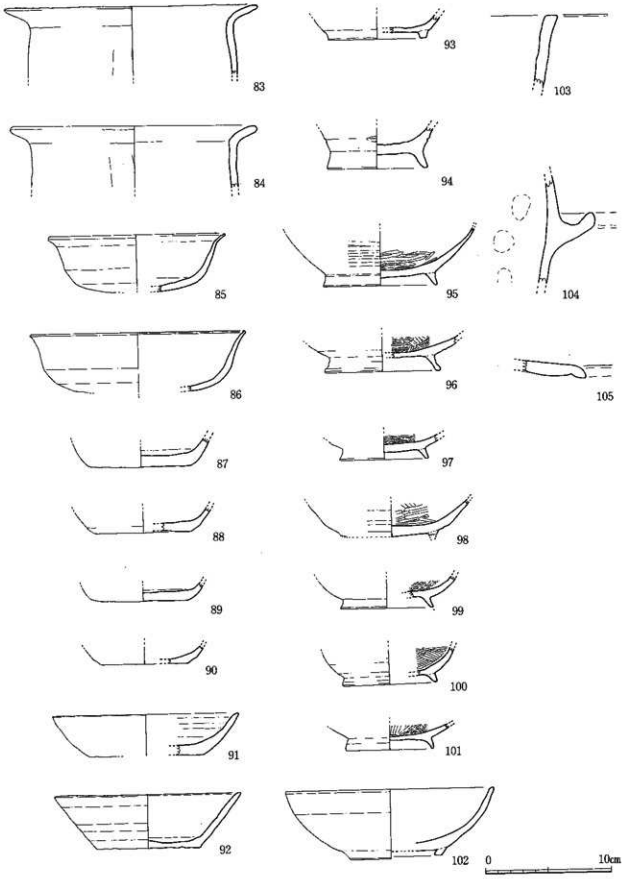
106～124 は須恵器である。**106・107** はともに坏蓋で、口縁部とつまみ部分である。**108～117** は坏身である。**108** は高台貼り付け部よりやや外方に張り出た底部から上方に立ち上がる体部を有し、口縁部は外反している。**115・116** は体部が高台付近から斜め上方に立ち上がる資料で、**110・116・**

117は畳付けの中央部を回ませている例である。118も坏身の底部と思われ、ヘラ切りされている。119は盤である。120・121は甕の口縁部、122・123は胴部であり外面は布目状痕、内面は同心円タタキ痕を有する。124は横瓶で口縁部が巻き込むように外湾しながら立ち上がる。外面は掻き目状痕がめぐらされている。125は中央部に穴が穿たれた石製品で例えば水車等の軸を固定するために用いられたとみられる石材であろうか。

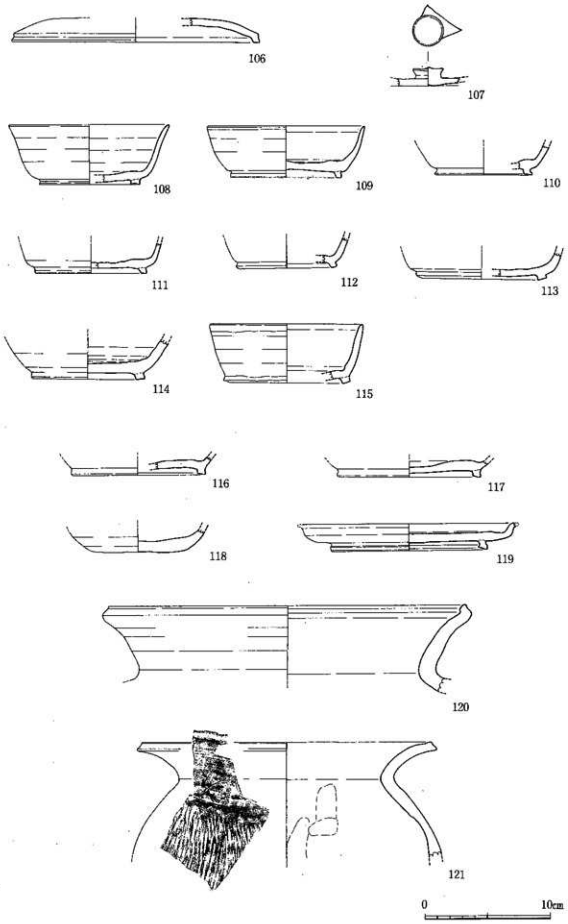
以上4号溝は弥生時代の遺物も若干みられるが、多くは8世紀末から9世紀前半にかけての遺物である。それ以前の遺物は流れ込みとみられ、溝の存続時期は奈良時代末期から平安時代はじめにかけてと考えられる。



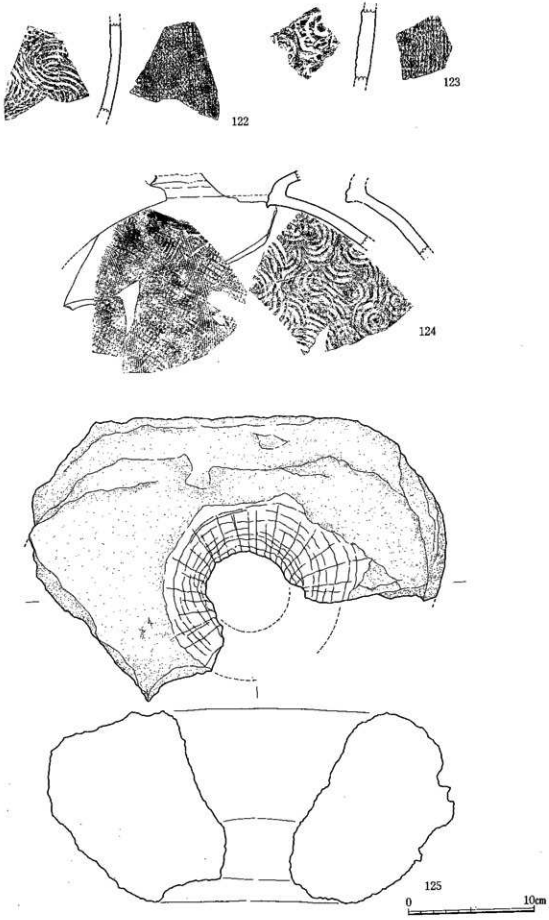
第17図　山ノ下遺跡4号溝出土遺物実測図1（1/3）



第18図　山ノ下遺跡4号溝出土遺物実測図2（1/3）



第19図　山ノ下遺跡4号溝出土遺物実測図3（1/3）



第20図　山ノ下遺跡4号溝出土遺物実測図4（1/3）

表8　4号溝出土遺物観察表(1)

単位：cm

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整 外面	調整 内面	使用痕	備考
73	甕	(19.8) — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、石英　少	灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		口縁部
74	壺	(20.2) — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、白色粒　少、 赤色粒　少	淡灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内面スス付着	焼成良好
75	甑	(3.0) — —	砂粒　少、角閃石　多、 長石　多、石英　少	淡黄褐色	タテハケメ　ヨコハケメ　ナデ 指ナデ	ナナメハケ　指ナデ　底部穴付近指圧痕		
76	高坏	— — (3.2)	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、石英　少、 白色粒　多	淡黄褐色	タテハケ	指ナデ		
77	壺	(14.0) — —	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少、金雲母　微量	明淡黄褐色	ヨコヘラミガキ ナナメハケメ	ヨコヘラケズリ		
78	高坏	— — 4.6	砂粒　多、角閃石、 長石、赤色粒　少	明赤褐色	ヨコナデ 脚部にタテヘラケズリ	ヨコナデ ナデ		穿孔4つ 脚部
79	高坏	— — 3.2	砂粒　多、角閃石　多 長石　多、石英　少 白色粒　多	淡黄褐色	タテハケメ ヨコナデ	ヘラケズリ 都部にヨコナデ		脚部
80	高坏	— — 4.1	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、白色粒　多 赤色粒　少	灰黄褐色	ヘラナデ 下側に板状圧痕	指ナデ　ナデ ヨコハケメ		穿孔2つ以上 脚部
81	高坏	— — (4.8)	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、白色粒　多	橙褐色	タテハケメ　ナナメハケメ　ヘラミガキ	しぼり痕のち ヨコナデ		脚部
82	台付鉢	— — (8.6)	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、石英　少、 白色粒　多	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		脚部
83	甕	(20.2) — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、白色粒　少	黄褐色	口縁部ヨコナデ 胴部ケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ナデ		
84	甕	(19.4) — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、石英　少	淡黄褐色	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	ヨコナデ		
85	坏	(14.4) 5.5 (10.6)	砂粒　少、角閃石　多、 石英　多、赤色粒　少	赤褐色	回転ナデ ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		顔料を施す
86	坏	(17.2) — 4.8	砂粒　少、長石　少、 石英　少	赤褐色	回転ナデ	ナデ		顔料を施す
87	坏	— — 8.4	砂粒　多、角閃石　多、 白色粒　少、赤色粒	橙色	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	ナデ	外50%スス付着	
88	坏	— — (7.6)	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少、白色粒　少	暗灰色 暗灰褐色	ヨコナデ 底部へラ切り後ナデ	ヨコナデ 指ナデ		
89	坏	— — 7.4	砂粒　少、角閃石　多、 石英　少　赤色粒　少	橙色	底部：ヘラ切り後ナデ	ナデ		
90	坏	— — (7.0)	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、黒色粒　多、 赤色粒　少	淡黄褐色	ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		
91	坏	(14.8) 3.3 (9.0)	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少	灰色	ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		
92	坏	(14.8) 4.4 (8.2)	砂粒　少、長石　少、 石英　少、赤色粒　多	橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ		
93	坏	— — (7.8)	精緻である	淡橙褐色	回転ヨコナデ 底部へら切り後高台をつけ指ナデ	指ナデ 回転ヨコナデ		
94	高台付鉢	— — (8.0)	砂粒　少、角閃石　多、 長石　多	淡黄褐色	回転ヨコナデ 底部へら切り後高台をつけ指ナデ	指ナデ 回転ヨコナデ		貼り付け高台 ヘラ状工具で調整痕あり
95	鉢	— — 9	砂粒　少、角閃石　多、 長石　多、赤色粒　多	外：明黄褐色 内：黒色	回転ミガキ螺旋状 高台部：ナデ 底部：ヘラ切り	不定方向ミガキ	外底部にスス付着	内黒鉢
96	鉢	— — (9.6)	砂粒　少、角閃石　多、 長石　少	外：淡褐色 内：黒色	回転ヨコナデ 底部へら切り後高台をつけ指ナデ	ヘラミガキ		内黒鉢

表9　4号溝出土遺物観察表(2)

単位：cm

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		使用痕	備考
					外面	内面		
97	埴	— — (7.0)	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、白色粒　微量	淡灰褐色	ヨコナデ	ヘラミガキ		高台径 内黒埴
98	埴	— — —	砂粒　多、角閃石　多、 赤色粒　多	外：浅黄色 内：黒色	回転ナデ ヘラ切り後ナデ(外底)	不定方向ミガキ	一部スス付着	内黒埴 中央部はナデ状の調整
99	鍋	— — (7.4)	砂粒　多、角閃石　多、 長石　少、赤色粒　微量	外：淡黄褐色 内：黒色	ナデ ナナメハケメ	ナデ ヨコハケメ痕 ナナメ指ナデ	スス付着	内黒埴 高台部指圧痕あり
100	埴	— — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、白色粒　少、 赤色粒　少	外：灰黄褐色 内：黒色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ		内黒埴 高台径
101	高台付皿	— — (6.8)	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、白色粒　多 黒色粒　少、赤色粒　少	外：暗橙褐色 内：黒色	ヨコナデ ヘラ切り離し後ヨコナデ(底部)	ヘラミガキ		内黒埴 高台径
102	鍋	16.7 5.3 8.3	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、白色粒　多	黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ	不明		全体的に摩耗
103	甕	(21.4) — —	砂粒　多、角閃石　多、 石英　少、長石　多、 赤色粒　多	外：にぶい橙色 内：橙	ナデ	ヨコナデ		
104	甕	— — —	砂粒　多、黒色粒　少 赤色粒　少、角閃石　多、 長石　少、雲母　多	橙褐色	指ナデ 指圧痕	指ナデ 指圧痕		把手
105	甕?	— — —	砂粒　多、角閃石　多、 長石　多、石英　少、 白色粒　少	淡橙黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		

表10　4号溝出土遺物（須恵器）観察表(1)

単位：cm

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		使用痕	備考
					外面	内面		
106	坏蓋	(19.6) 1.9 —	砂粒　少、角閃石　微量、 白色粒　微量	灰色 明灰色	回転ヘラケズリ 指ナデ	回転ヨコナデ		
107	坏蓋	— — —	砂粒　多、 白色粒　微量	にぶい灰色	回転ナデ	回転ナデ		
108	坏身	(12.6) 4.7 8.0	砂粒　少、　白色粒　多	明灰色	回転ヨコナデ ヘラ切り	回転ヨコナデ 指ナデ		
109	坏身	12.6 4.0 9.8	砂粒　少 角閃石　微量 白色粒　少	暗灰色 灰色	回転ヨコナデ 回転ヘラ切り	回転ヨコナデ ロクロナデ		
110	坏身	— — 7.6	砂粒　少、角閃石　微量、 白色粒　少	暗灰色 灰色	回転ヨコナデ	回転ナデ		
111	坏身	— — (8.8)	砂粒　多、長石　少、 白色粒　多	暗灰色	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ 指ナデ		
112	坏身	(8.0) — —	砂粒　少、白色粒　多	暗灰色 灰色・　暗茶色（胎土）	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
113	坏身	(10.4) — —	砂粒　少、白色粒　多	灰色	ヨコナデ	ヨコナデ		
114	坏身	(9.0) — —	砂粒　多、角閃石　多、 白色粒　少、赤色粒　少	青灰色	ヨコナデ 底部ヘラ切り	ヨコナデ指ナデ		
115	坏身	(12.0) — (9.6)	砂粒　少、白色粒　多	外：暗灰色 （口縁部） 内・外：灰色	ヨコナデ	ヨコナデ		
116	坏身	— — (10.6)	砂粒　少、角閃石　微量、 長石　微量	明灰色	回転ヨコナデ ナデ 底部：回転ヘラケズリ ヘラ切り痕し痕	回転ナデ		

表 11　4号溝出土遺物（須恵器）観察表(2)

単位：cm

番号	器種	口径 器高 底径	胎土	色調	調整		使用痕	備考
					外面	内面		
117	坏身	－ － （11.2）	砂粒　少、 白色粒　多	暗灰色	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ 指ナデ		
118	皿	－ － （6.8）	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少、白色粒　少	明灰色	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ 指ナデ		
119	盤	－ － （13.4）	砂粒　少、角閃石　微量、 灰色粒　多（外）	外；暗灰色 内；淡灰色	回転ヨコナデ ヘラ切り後指ナデ	指ナデ（底部）		
120	甕	（28.4） － －	砂粒　少、白色粒　多	青灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		
121	甕	（22.6） － －	砂粒　少、白色粒　少、 黒色粒　少、赤色粒　少	明灰色	ヨコナデ（口縁） タタキ（胴部）	ヨコナデ 指圧痕		
122	甕	－ － －	砂粒　少、角閃石　少、 長石　少	暗青灰色	布目痕	同心円タタキ		胴部
123	甕	－ － －	砂粒　少、角閃石　少、 白色粒　微量	暗青灰色	布目痕	同心円タタキ		胴部
124	横瓶	（9.6） 頸部 －	砂粒　少、 白色粒　微量	明灰色	ヨコナデ(口縁部) 格子目タタキ後カキ目（胴部）	ヨコナデ(口縁部) 同心円タタキ(胴部)		俵型

表 12　4号溝出土石製品計測表

	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	孔径	
2	凝灰岩	22．4	30．5	15	8500g	上径140	下径62

第4章　まとめ

山ノ下遺跡は、古墳時代前期以降8世紀後半までのおよそ400年間の空白期をはさんで2時期の遺構が検出された。これらを各時代ごとにその成果や問題点を簡単に述べてまとめとしたい。

弥生時代中期～古墳時代初頭

本遺跡の主な遺構は4本の溝である。いずれの溝からも弥生時代の遺物が出土している。そのうち4号溝については、弥生時代中期～古墳時代初頭の資料は量や出土状況から考えて流れ込みの可能性が高い。したがって本遺跡においては1・2・3号溝をもって弥生時代～古墳時代の遺構とする。1号溝からは弥生時代中期～古墳時代初頭の土器が混在しているのに対し、2・3号溝は弥生時代終末～古墳時代初頭の土器に限られている。1号溝より出土した完形に近い土器は溝上層から出土しているがこれらは弥生時代終末～古墳時代初頭に位置づけられる。また、2・3号溝から出土した土器も同時期であることから3本の溝の埋没時期はほぼ同じと考えてよい。さらにつくられた時期については、1号溝が最も早いとみられる。

調査区内では住居址は検出されなかったが、蔦川へ向かってテラス状に張り出すように広がる調査区周辺で、北側に隣接する地域には住居址二棟と溝状遺構一条が検出されている。(平成12年度

豊後高田市教育委員会の調査による）この溝状遺構は流路や規模から本遺跡の３号溝の延長と考えられ、水田や生活に利用していたと思われる。遺物も３号溝と同じ弥生時代終末期のものである。このことから背後の小高い山地と蕗川寄りに広がる居住空間とを画するように１号溝を巡らせ、その性格は山地からの水を受ける排水用の水路としての役割や上流から蕗川の水を取水し、２・３号溝のような引き込み水路をつくり水田へ利用した用水路としての役割が考えられる。ただここで１号溝が４号溝に上流部で切られている地点では溝同士が直交する位置にあり切られた１号溝の延長部は検出されなかった。このことは１号溝が蕗川に接続された溝ではなく、川からは独立した集落に伴う溝の可能性もとも考えられる。

２号溝と３号溝については異なる点がみられる。それは分岐点のレベル差で、２号溝は１号溝床部と同レベルであり３号溝は床部から20㎝高い位置から取水するようになっている点で両者は利用目的に違いがあったのではないだろうか。３号溝では土器の出土地点は２つのグループに分かれており、一つは１号溝からの取水口近くで、水口祭祀をうかがわせる。もう一つは溝が調査区北側へにげる地点で検出されている。

このように蕗川流域は小河川のため川床が浅く、用水利用の面において容易に水が得やすく、集落の営みや水田開発が行われやすかったと推察される。

また、土器の出土状況は弥生時代終末期にみられる一括廃棄されたような土器群ではなく溝全体にわたって均一的、分散的に検出されていることから、まとまった集落の存在も考えがたく、沖積地が広がる本遺跡から下流域の両岸に小集落が点在した可能性が指摘できる。また、壺や甕などには安国寺式や瀬戸内系の土器が一部みられ、高坏には庄内式併行期の様相を呈するものも数点出土したことから畿内や瀬戸内地方との交流に伴う文化の影響を受けていたこともうかがえる。

奈良時代末期～平安時代初頭

この時期の遺構は４号溝である。蛇行する蕗川は狭隘な蕗谷から桂川との合流部のひらけた糸永地区に出る。この地域は蕗谷では古くから水田開発が行われていたとみられ、糸永名としても名前が出てくる。また、糸永地区の３町９反を灌漑する蕗川最大のイトナガ井堰が谷が広がる地点に位置する。

古墳前期以降一旦滞ったとみられる水田開発が再開されるのがこの時期であろう。田染盆地の桂川流域では律令制度にもとづいた条里的地割りの施行時期が８世紀後半～９世紀前半以降に始まったと考えられるが、支流である蕗川下流域の開発もこれとほぼ並行して行われようとしていたと推察される。４号溝は上流部に向かいイトナガ井堰方面にのびており、取水していたことが予想される。イトナガ井堰の文書での初見は1165（長寛３）年関白家政所下文である。

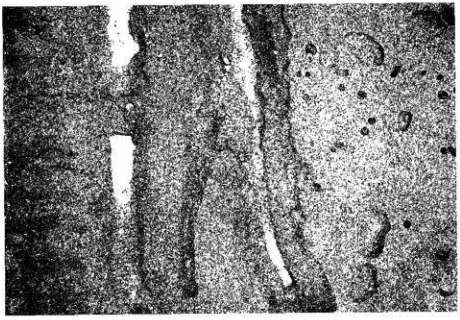
糸永名が成立する年代は不明であるが、この４号溝は現イトナガ井堰より下流部の水田開発に大きな関わりをもったと考えられる。しかし溝の存続が８世紀末～９世紀初頭とするならば短期間の用水路としての役割にとどまったとみられ、水田開発がとん挫したか、水路自体に欠陥が生じたか、つけかえが行われたなどいろいろな理由が考えられる。

参考文献　「下屋形遺跡」1998年　大分県教育委員会
「豊後國田染荘の調査Ⅰ」1986年　大分県立宇佐歴史民俗資料館　報告書第３集
「豊後高田地区遺跡群発掘調査概報ⅩⅦ」2001年　豊後高田市教育委員会

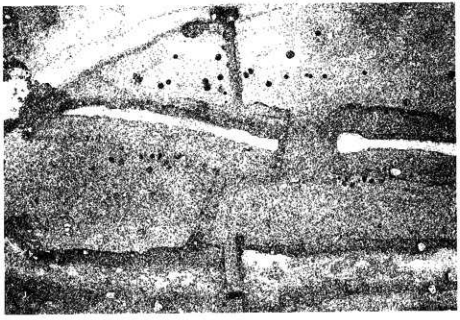
写 真 図 版

写真図版1

調査区全景



2号溝

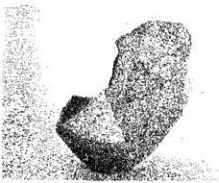


3号溝

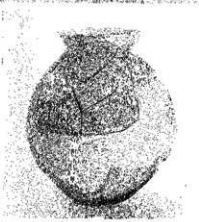
写真図版2

7

12


30

33


37

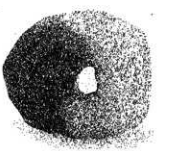
41

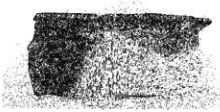
9

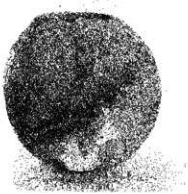
20

25

36


36


40


42

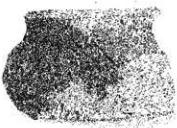
43

44

46

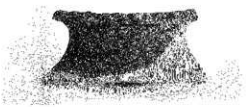
47

48


51

53

54

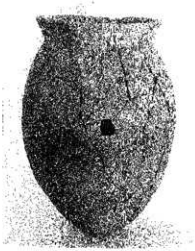

55

57

58

62

写真図版4



63

64

65

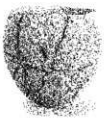
66

67

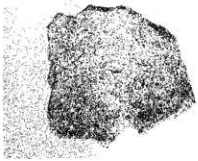
68

71

70



72


75

75

76

78

79

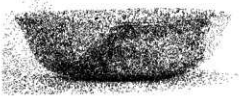
80

81

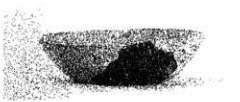
83

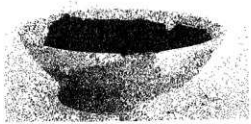
85

84


86

92


90


96

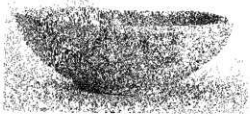
写真図版6

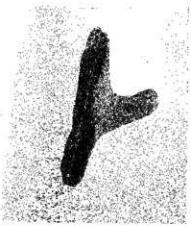
94

97

100

101

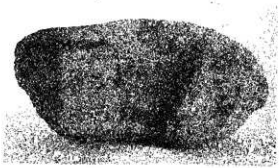

102


104

109

121

124


125

報告書抄録

フリガナ	ヤマノシタイセキ
書名	山ノ下遺跡
副書名	葛川火山砂防護岸工工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財報告書
シリーズ番号	第142　輯
編著者名	井川泰成
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870－0021　大分市府内町3丁目10番1号
発行年月日	2002年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
山ノ下遺跡	豊後高田市大字葛	44209	189	33°30′44″	131°30′38″	平成12年9月11日～平成12年11月13日	1500㎡	河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山ノ下遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	溝4条	弥生式土器・土師器・須恵器・石包丁	

山ノ下遺跡

藤川火山砂防護岸工工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年3月29日
発行　大分県教育委員会
印刷　明治印刷株式会社